
コードギアス ギアスクエスト

キリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コードギアス ギアスクエスト

【Zコード】

Z7962R

【作者名】

キリ

【あらすじ】

「 枝木よお、死んでしまうとは情けない……！」
「 え？」

気がつくと、スザクは豪奢な広間に立っていた。

ムシャクシャして勢いで書いたギアスのアナザーストーリー。
スザク主人公のファンタジーです。

「枢木よお、死んでしまつとは情けない……」
「え？」

気がつくと、スザクは豪奢な広間に立つていた。
「ここって、まさか……」

見た覚えのあるその場所は、神聖ブリタニア帝国首都、皇都ペンドラゴン。その、玉座の間である。

「いや、でもそんなはずは……」

この場所は、シュナイゼルが空中要塞ダモクレスによるフレイヤの一撃によつて、消滅したはずであった。それどころか、目の前にいる人物　玉座に悠然と腰掛けている人物は、この世界で消え去つたはずのシャルル・ジ・ブリタニアではないか。

「一体、何が起こつているんだ？」

思わず自分の頬をつねる。

「……痛い」

夢じやないのか。それとも自分は本当に死んでしまつたのだろうか。覚えてはいないが。

「何をしてある。早く魔王の手から我が姫を救い出してこぬか

「姫？　魔王？」

「そうだ。我が娘であるコーフュニアを魔王の手から救い出していくのが、勇者たる貴様のやるべき」とやうにいふが、

「コフイ……！」

いるのか、コフイもつ！

「　て、勇者？」

「一体何が何だかわからない。ここは本当にブリタニアなのか？」

「ふうむ。しかしあ、貴様ひとりに任せると、また死んでしまうしあれがあるからな。少し助言をしてやう。城を出てすぐ右の酒場で仲間を集めよ

それだけ言うと、両脇に控えていた衛兵に命じて、スザクを玉座の間から引き摺り出す。

「え？」ちゅう……」

バタンと扉が閉じられる。再び扉を開けようとするも、どういつたわけか、スザクの臂力をもつてしても扉を開くことはかなわなかつた。

……一体何なんだ？

スザクはとりあえず言われた通りに、城を出てすぐの酒場へと向かつた。

アッシャー・バーの酒場へ おこへ

生徒会長

イ・アッシュフォードだった。

「あれ？　スザクじやんか。なになに、仲間でも探しにきたの？」

ウエイター姿のリヴァル・カルデモンドが、スザクの肩に腕を回

してそこへ笑しかけた

「アーチャー、おめでとう……」

二ハ兩足以アツツ。

「ジノアニ=」

「おお、スザク。俺達に何かようつか?」

「仲間？」

ジノ・ヴァインベルグとアーニャ・アールストレイムがズザクの

前へとやつてくれる。

ジノはともかく、アリヤ、君のその格好……」

アーニヤは鶴広のとんがり帽子に、マントを羽織つてゐる。その

姿は、さながら某エロゲーの軍師のコスプレだ。

「魔法使い、だから」

「魔法使いつて……」

本当に一体全体、この世界はなんなのだらうか。わけがわからぬまま、スザクは本編同様流されていく。何はともあれ、スザクは騎士と魔法使いの仲間を手に入れたのであつた。

「とりあえずあれだな。まずは武器屋だらう」

ジノの言葉に、スザクは頷く。

もう何が何だかわからなかつたが、とりあえずゴーフロニアは助けたい。そのために魔王というヤツを倒さないといけないのであれば、そのための武器は必要だらう。

「だったらあつち」

アーニヤが手にした曲がった金属棒（ダウジング棒）の開いた方向を示す。そこには、一台のトレーラーハウスが停まっていた。

「まさか……」

「オメデトーーー！」

「ようこそいらっしゃいました。ゆっくりしていって下さいね」三人を出迎えたのは、やはりというかなんというか、ロイド・アスブルンドとセシル・クルーミーであった。

「あの、剣とか欲しいんですけど……」

「いいのあるよお」

そういうロイドが奥から出してきたのは、鈍色の輝きを放つ片

手剣。

「アロンダイトっていうんだだけね。刃こぼれしきことで有名なんだよ?」

「えーっと、じゃあそれで」

特に深く考へることなく、スザクはそれを受け取る。どちらかといふと、早くこの場を離れたいスザクであった。その間に、二人もセシルから武器を受け取る。ジノは両手剣を、アーニャは杖を手に入れていた。

「今なら特別に君らの身体も改造してあげるけど、どうあるう?」

「お断りします」

声を揃えてそう言つと、「あ、そ」とロイドは拗ねたようにそっぽを向き、それから意地の悪い笑みを浮かべ、

「じゃあその武器の料金なんだけど、大体一千万円ってどこかな? 君たちに払える? もし改造させてくれるのならその武器の料金をタダにしてあげても……」

「……ロイドさん!」

ロイドの背後には般若の如き表情を浮かべたセシル。

「あ、「メンナサ」……」

ロイドの悲鳴を背にして、三人は一路魔王城へと向かうべく旅立つのであった。

つづく？

好敵手の章

「さて、魔王城への行き方だが。まず船に乗つて、魔王城のある蓬萊島に向かわないとな」

「道中魔王配下の敵が襲つてくるから、気を付けないと」

「人はそう言つてスザクのあとを一列でついてくる。」

「二人とも説明ありがとう……。さて、それじゃあ、まずは自分たちで動かせる船を探さないといけないわけだね」

ブリタニアの首都ペンドラゴンは、内陸部にある。沿海部まで歩いて向かうとすると、どれほど時間がかかるか。

「さて、どうしたものか……」

スザクは腕組みし、首をかしげる。その肩をポンポンと叩くものがいた。

「乗り物なら、ある

アーニヤが示した先には、観光地にあるような三人乗りの自転車。

「……これかい？」

全身で乗りたいアピールをしているアーニヤに対し、びつ断るベキかジノの顔を伺うと、彼は両手を挙げて首を横に振った。

その港町までたどり着いたのは、およそ三日後のことであった。自転車は金属疲労をおこし、タイヤはこれでもかとすり減つている。余談ではあるが、彼ら三人のこぐ自転車は時速180kmをマーケし、世界記録を軽く塗り替えている。魔王配下の敵も、襲いかかるビービーではなかつた。

「……ということで、船を探さないといけないわけだけど

「とりあえず腹ごしらえだな」

「お腹、減つた」

三人で買い物をしながら市場を練り歩く。するとそこへ、大きな怒声が響いた。

「おひおひ、俺を誰だと思つてやがんだア？ 泣く子も黙る魔王軍、黒の騎士団の玉城さまだぞオ！」

何事かとその声の方へ向かうと、すでに人垣ができており、そこへスザクは身体をねじ込むようにして内側の様子を伺う。そこには、チンピラが因縁をふつかけるように恫喝する男の姿と、真っ向から対立するように肩を怒らせた少女 シャーリーの姿があった。

「知らないわよ、そんなの！ それより商品弁償しなさいよ！」

シャーリーの言葉に、見れば足元に踏みつけられた跡の残る商品と思しき花束があつた。

「ああん？ 知らねーよー テメエが落とすから悪いんだろうがよオ！」

そう言つてシャーリーにつかみかかろうとするチンピラ玉城。スザクは素早く躍り出ると、その腕を捻るようにしてつかんだ。

「うおいちちちち……！ 何だテメエはコラアー！」

「やめろ、相手は女性だぞ！」

「テメエ、俺を誰だと思つてやがる！」

玉城が涙目で訴えたその時、

「 魔王軍だろ？ じゃあ倒してしまつて問題ないな」

人垣の中からジノとアーニャが不敵な笑顔を浮かべ、ゆっくりと近づいてくる。

すると、それを阻むように一本の剣が地面に突き刺さつた。

「 むつ……」

ジノとアーニャが足を止める。その場にいる全員が剣の飛来した方へと視線を向けた。

「 そこまでにしどきな！」

そこにいたのは、無駄に口の格好をした赤毛の女戦士、紅月力レンの姿。

「 か、カレン……！」

「そっさ、あたしの名は紅月カレン。黒の騎士団零番隊隊長であり魔王ゼロの一番の腹心、紅月カレンさまだ！」

黒の騎士団に、魔王ゼロ。そうなるとやはり魔王の正体は……。

スザクは頭が痛くなる。

「カレン！ 助けに来てくれたのか！」

玉城が叫ぶ。しかし、カレンはふんっと鼻を鳴らし、

「あんたみたいなバカ知らないよ。大体、掃除夫のあんたが偉そうに黒の騎士団名乗つてんじやないよ！ あたしが用があるのは、そこの男さ」

そう言つてスザクを指さす。

「あんた、魔王討伐を企む勇者なんだってね。そつはさせないよ。あんたは今この場であたしが倒す！」

そういうて屋根の上から飛び降りスザクのもとへと一直線に駆け寄るカレンの腕には、鉄製の鉤爪が。

「くつ……！」

思わず後退り剣を構えるスザクに、さらに高速で鉤爪を振るうカレン。剣と鉤爪がぶつかり合う度に、激しい火花が一人の間に瞬く。

「スザク……！」

駆け寄ろうとするジノに対し、カレンが鉤爪を向けた。

「外野は黙つてな！ 輻射の波動！」

そういつた次の瞬間、ゴオっと炎が渦巻き、ジノを襲つた。

「ジノ！」

「くつ、魔法戦士か！ アーニャ！」

ジノがアーニャの名前を叫ぶ。すでに集まつていた人々は逃げ惑い、その周囲には誰もいなかつた。

「わかつてる。 ブレイズルミナス！」

アーニャの足元に複雑な魔方陣が浮かび上がる。

そうしてジノと炎との間に、透明な壁が現れた。

「へえ、やるじゃないか！」

カレンの意識がジノとアーニャの方へと向かうその一瞬の隙を、

スザクは見逃さなかつた。

「うおおおおおつ……！」

「なつ……！」

スザク必殺の突きを、カレンは鉤爪で受ける。しかし、鉤爪はその尖すきる一撃に耐えることができず、ピシリと音を立てて砕けてしまつた。

「チイ……油断した！」

大きく飛び退ると、カレンは砕けた鉤爪に視線を移す。

「これじゃあもう戦えないね。しうがな、今回はあんたたちの勝ちにしといてやるよ」

そう言つて身を翻すカレンを、スザクは黙つてみつめていた。

「……カレン、いこでも君は、僕の前に立ちふさがるのか」

つづくはず。

「君と話をするのは、初めてになるね」

品の良い面立ちにアルカイックスマイルを湛えつつ、シユナイゼルはさりげなく部屋中央のソファを示す。

それに従いストレートの長い髪の少女 C.C. が素直に腰掛けると、シユナイゼルも向かい側のソファへと座り話の続きを始めた。

「ふむ。こつして実際に相対してみても、普通の女性とさして違があるようには見えないね。しかし、そうか……君がC.C.か」

「その口振りからすると、私のことは知っているようだな」

「ある程度はね。」C.N.E.R.I.A.が調べたギアスについての情報はもちらん、クロヴィイスの遺した情報も君という存在を理解する上で有益だつたよ」

クロヴィイス・ラ・ブリタニア。今は亡き神聖ブリタニア帝国第3皇子で、ルルーシュやシユナイゼルにとつて腹違いの兄弟である。C.C.はかつてエリアー1の総督だった彼に捕らえられた際、その身を研究されたことがあつたが、そのときの研究資料が残つていたのだろう。

「そうか。それなら話が早い。今回私がここにきた目的なんだが

「さて

C.C.からその計画の全貌を説明される間、シユナイゼルは表情から笑みを絶やすことなく、ただ淡々と話を促していった。

そうして一通り説明を聞いた後、シユナイゼルは一言、それを口にする。

「やはり、彼は怖いね」

その言葉に、C.C.が相槌を打つ。

「まあな。だが、こと神算鬼謀に関しては、お前も似たようなもの

「どうつ?」

「ああ、そうこう」とではなくて……」

ショナナイゼルは口元を隠すように手で覆い、言葉を探すようにして続ける。

「ルルーシュは　彼は人の心の動きまでも戦略に組み入れてしまふ

「どう違うんだ？　それはお前も同じことだろつ?」

「似ているようで、全く違うさ。私は人の心を読むことは余り得意ではないんだ。相手の嗜好や行動パターンからいくつかの予測を立てはするけれどね。それらの予測をもとに、それぞれに対応する戦略を用意することはできる。しかし、ルルーシュは違う

ショナナイゼルは脚を組みかえ、さらに言葉を続けた。

「　昔、彼とはよくチエスをしたものでね」

「ん？」

唐突な話題の転換に、Ｃ・Ｃ・は戸惑いの表情を見せる。

「まあ、チエスに限らず戦略性のあるゲームはどれもそうなんだが、そこにはある種打ち手の行動パターン　呼吸というものが存在する。その呼吸を乱すことがゲームの要ではあるんだが、ルルーシュの場合、相手の呼吸を読んだ上でさらにそれを利用する手を得意としていてね」

「ああ、そういうことか」

「頑なに相手はこう来るであろうと信じるがゆえに、相手が自分の予測とは違った動きを見せると弱かつたが、はまるとまず負けなかつたね。ゲームに負けることこそなかつたが、私は彼のそういうた打ち筋を恐れると同時に、ひどく愛おしいと感じたものだよ」

「愛おしい？」

思ひがけないその言葉に、Ｃ・Ｃ・が目を見張る。

ショナナイゼルは両手を膝の上で組むと、どこか遠くを見るようにして言った。

「ルルーシュは　彼は、昔からナナリー以外には兄弟にさえ心を

開かない子でね。唯一例外だったのは、コフィイくらいなものかな」
血で血を洗う王宮の中にあって、それは当然の帰結であったのか
もしれない。実際、ルルーシュやナナリーを忌み嫌う兄弟も数多く
存在した。だが、少なくともシユナイゼルは、幼くも賢しい弟のこ
とが嫌いではなかった。

「そんな彼が、チェスの上では私の呼吸を読み、それを利用する手
を打つてくるんだよ」

相手を理解して戦略を練るということは、ひいては相手を信頼す
るということに他ならない。

敵を倒すために敵を信頼する。誰も信じようとはしないルルーシ
ュが、ゲーム上での事とはいえ自分を信じてくれる事が、シユナ
イゼルには小気味よかつた。

「少し、嬉しかったね」

「シユナイゼル、お前は」

「C・C・Cが何かを口にしけけ、しかしそれを否定するように頭を
振ると、それを見てシユナイゼルはふっと息を吐いた。

「さて、少し話が長くなってしまったようだ。式典については了承
した。他には何かあるのかな?」

「やけに素直に従うんだな」

「反対する理由などないさ。私はただ、ゼロに従うだけだよ」

「C・C・Cは席を立つと、足早に出入り口へと向かった。

そうして、部屋を出て行こうとしたC・C・Cの背中に、シユナイ
ゼルが声をかける。

「ああ、そうそう。ルルーシュは信じないだろうけど、私は彼のこ
とが好きだったよ」

部屋を出る際に見えたシユナイゼルの笑みが、偽りの仮面による
ものかどうかC・C・Cには判らなかつた。

番外編 ハードギアスAFTER・5でボツにした話（後書き）

タイトルまんまです。

外付けHDD買ってパソコン整理してたら出てきたので、消す前に
ついでに晒そうかと。

SSも完結にしちゃったし、まあいいでいいかな、つと。

「　スザクが港町に現れたという情報は確かか」
黒い仮面の男ゼロは、魔王城たる斑鳩のブリッジまでやってくる
と、開口一番にそう言つた。

それに対し、側に控えた黒の騎士団四天王のひとり、ジヨレミア・
ゴッドバルトがそれに答える。

「はい。確かにようで。今し方、紅月から連絡がございました。ヤ
ツめと接触した折に、紅蓮の鉤爪が砕け、撤退したとのこと」
「そうか。捕縛はできなかつたか。まあいい、チャンスはいくらで
もある。こちらにコーフェミアというカードがある限り、ヤツはこ
こを手指してくるはずだからな」

そのために彼女を攫つたのだから。

仮面の下で不敵な笑みを浮かべるゼロ。

「兄さん」

そんなゼロへと声をかけたのは、幼い顔立ちをした少年、ロロ・
ランペルージであった。

「今度は僕に任せてよ。所詮カレンは四天王の中でも戦闘だけが取
り柄のビッチさ。僕が必ずあいつを捕まえてみせるよ」
まるで忠犬のように瞳を輝かせるロロに対し、

「……いいだろ？ 行け、ロロ。スザクを、ヤツを私の前に引きず
り出せ！」

ゼロは芝居掛かった仕草でマントを翻した。

「それにしても、本当にスザクがこの妙な世界を抜け出す鍵なんだ
らうな？」

執務室に戻ると、ゼロの仮面とマントを外し、ルルーシュはドッ
と深く椅子に腰を下ろした。

「おやらくな」

ルルーシュの問いに答えたのは、ソファに腰を下ろし、ピザにむ
しゃぶりついているピザ女 もとい、細身の美しい少女 C · C ·
であつた。

「おやらくなでは困るんだよ、おやらくなでは

「では言い換えよう。多分な」

「何も変わつていない！」

机に両手をついて苛立ちを表すルルーシュに、我関せずとピザを
食べ続けるC · C ·

「……まあいい。それより

ルルーシュが何かを言いかけた瞬間、電子音と共に自動ドアが開
く。

「お待たせ、C · C · 新しいピザが焼けたわよ」

ドアの向こうから現れたのは、桃色の髪をした優しげな面立ちの
少女、ゴーフルミア・リ・ブリタニア。

「……って、何をしている、コワイ！？」

「C · C · がピザを食べたいといつていたから。いけなかつたかし
ら？」

ゴーフルミアの手には、その言葉通り今焼けたばかりであらうピ
ザが。その香ばしい香りに吸い寄せられるように、C · C · がゴー
フルミアのもとへと向かう。

「君は攫われたんだぞ、わかっているのか？」

「ええ、そうでしたね。すみません……」

ゴーフルミアがシヨンとうなだれる。

「むぐむぐ。……タラモピザか。白胡麻が使われていて、香ばしい
な」

「やうでしょ？ 隠し味にほんの少しサフランを……

C · C · の言葉に、ゴーフルミアが顔を輝かせる。

「はあ……」

ルルーシュはため息を吐くと、もう一度深く椅子に腰掛けるのだった。

一方、枢木スザクを捕獲に向かったロロは、
「待つて、兄さん。僕があいつを、スザクを殺してみせるからね」
やはり口口であった。

仮面の章（後書き）

喉が痛い。確実に風邪です。

船出の章

「本当にありがとうございました！」

シャーリーが頭を下げる。スザクは「とんでもない」と両手を前に突き出し首を横にふる。

「でもまあ、こんだけの騒ぎを起したら、蓬莱島まで船を出してくれるヤツなんていないかもなあ……」

ジノがそう言つと、シャーリーはバッと顔を上げ、

「蓬莱島まで行きたいんですか？ でしたら、私の友達に」

そこは港町にほど近い、鍾乳洞を利用した乾ドックだった。

わずかな照明のもと、収められた船の上に、ひとつの人影がある。「許さない許さない許さない許さない許さない許さない許さない、ユーフェミアさまを攫うなんて！ 私の女神様！ 助ける、助けて見せる、私が必ず！」

それは、悪魔のような形相をした二ーナ・アインシュタインの姿だった。

「二ーナ」

そんな二ーナに躊躇つことなくシャーリーは声をかける。

「何？ 何しにきたの？」

力チャ力チャと船を弄つていた手を止め、二ーナはシャーリーの方へと振り返つた。

そこに、見たことのない三つの人影を見つけ、彼女は身をくめ警戒する。

「誰？ 誰なのそいつらは……！」

震える声で言つと、手にした拳銃をスザクたちに向けた。

「ちよつ、待つてくれ二ーナ、僕たちは

スザクが言い終わる前に、シャーリーがスザクたちの前に出て両手を広げた。

「……？」

「この人はたちは違うの ！」

「そう、ブリタニアの要請で……」

「一ナはそう言ってスザクたちを值踏みするように睨めつけた。

「それでこの船、ガニメデに？」

「そう、僕たちも乗せていいってくれないだろうか？」

「……」

「一ナは考える。自分の考えていた方法だと、確實にユーフェニアを助けられるという保証はない。

「ここはスザクを、彼らを利用するのも手かもしれない。

「……いいわ。乗せていいってあげる。でもその変わり、絶対にユーフェニアさまを助けて。絶対に……！」

「わかった。必ず救つてみせる、必ず僕が、この手で……！」

そう言ったスザクの顔を、一ナは冷ややかに見つめた。
船は、その四日後に出発した。

船出の章（後書き）

体の節々が痛い。ダルイよ。

船は、その四日後に出発した ものの、それは二ーナの造つて
いた船、ガニーメーデではなく、別の船であつた。

時を遡る」と二日前。

「どうして……」

二ーナは呆然と呟く。

どうやら、二ーナの船、ガニーメーデに搭載された兵器が起動しなかつたらしい。

「でも、船は動くんだろ?」

ジノがそう言つて二ーナの肩に手をやると、彼女はそれを振り払つて、キッヒジノを睨みつけた。

「それじゃ意味がないの! 貴方たちが助けられなかつたら、誰がユーフェニアさまを助けると思つてるの! ?

「僕たちが必ず助けてみせるから……」

スザクの言葉に、二ーナはジノからスザクへと視線を移す。

「上辺だけの言葉はやめて! どうして命をかけて助けるつて言えないの? 私は違う。自分の命を捨ててでもユーフェニアさまを助けてみせるわ! 」

命をかけて、か。

スザクは自分にかけられた「生きる」というギアスのことを思つ。そして、ユーフェニアが言つた「生きて」という言葉も。

「ヒステリー……」

アーニャは手にした携帯のカメラ機能で、二ーナの姿を撮影する。

「……つ! もういい、出てつて! 」

二ーナのものすごい剣幕に、スザクたちはその場をあとにするのだった。

「さて、振り出しに戻っちゃったなあ」

ジノはそう言って市場で買った串焼きを頬張る。咀嚼し、幸せそうに鼻を鳴らすジノとは対照的に、スザクは真剣にこれからどうしたものかと悩んでいた。

「どうしたものか……」

「あれ」

アーニヤがスザクの肩を叩き、前方を指さす。

「何だい？」

何かいいアイデアでもあつたのかとスザクは視線を上げ、そして少しだけ泣きそうになつた。

そこには、子供から玩具を取り上げようとしている玉城の姿が。

「いいからちょっとだけ貸せつて！ 僕を誰だと思つてやがんだ？」

黒の騎士団一のケン玉名人玉城様だぜつ！」

「で、どうする？」

ジノが手にした串を玉城へと向けた。

「僕が行く」

スザクがそう言って、疲れたように玉城へと向かつていた時だつた。

「感心しないね」

横手から現れたのは、いかにも上辺だけで笑みを浮かべているような金髪碧眼の男、シュナイゼル・エル・ブリタニアであった。

「子供から玩具を取り上げるなんて、感心できることではないね」

「んだテメエ、これは借りてるだけアイタタタタ……！」

玉城は後ろ手に捻り上げられると、地面へと組み伏せられる。気づけば、彼らの周りには数人の屈強な男たちで囲まれていた。

「くそつ、またかよお……！」

シュナイゼルは玉城が落としたケン玉を拾つと、とられた子供に差し出す。

「さあ、受け取りたまえ」

「ありがとう、領主さま！」

子供はケン玉を受け取ると、シュナイゼルに手を振つて去つてい
つた。

「ん？ おや、君たちは 」

シュナイゼルはスザクたちの姿に気づくと、笑みを深くするのだ

つた。

領主の章（後書き）

仕事に行つたら熱が上がりました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7962r/>

コードギアス ギアスクエスト

2011年6月26日18時02分発行